

上代語の同族目的語構文を再考する

佐佐木 隆

一

文中に現れる他動詞とその目的語とが「同族」に属する語である場合、それらの連結形式や一まとまりの表現は「同族目的語構文」と呼ばれる。この構文に属する表現が上代以降のどの時代にも用いられたことは、各時代の文献・資料を博搜すればただちに確認できることである。本稿では、上代語を反映する文献に見える同族目的語構文につき、既に説明されている諸事実を踏まえたうえで、新たにいくつかのことを確認したい。

上代に用いられた同族目的語構文の例としては、これまで「眠を寝」「心を思ふ」「音を泣く／音を鳴く」などの、『萬葉集』の歌に見える表現があげられ、さまざま角度から分析され考察されてきた。また、その考察の際には、名詞が目的語ではなく主語になった「命生く／命死ぬ」という表現も、同族目的語構文の類例として取り上げられることが多かった。

上代語の資料でも、単に「寝」「思ふ」「泣く／鳴く」「生く／死ぬ」などの動詞だけを用了表現がずっと多い。現代語でも動詞だけを用了、「眠」「心」「音」「命」などにあたる名詞は用いない。そうした状況では、同じ動詞がそれらの名詞を伴うかたちの上代語の表現は特に目立つから、上代語研究者の目が同族目的語構文に向いたのは、きわめて当然のことだった。

「眠」と「寝」、「心」と「思ふ」、「音」と「泣く／鳴く」、「命」と「生く／死ぬ」のどの組でも、名詞と動詞とは、品詞の相違を越えてきわめて近い意味を表すものになっている。だから、これらの表現について言う「同族」とは、名詞と動詞とが、互いに語源を異にしながらもきわめて近い意味を表す、といった場合をさす。

一方、現代日本語の同族目的語構文について、研究者が頻繁に引き合いに出す具体例には、「歌を歌う」「踊りを踊る／舞を舞う」の二種の表現がある。「歌」と「歌う」も「踊り／舞」と「踊る／舞う」も、ともに語源を同じくする語だから、二種の表現について言う「同族」とは「同源」の意である。⁽¹⁾「同族」の内容も、実際には二種に分けられるのである。

上代の歌・宣命・祝詞⁽²⁾などに見える同族目的語構文の実例については、前稿で一つ一つ分析を加えながら私見を述べた。ここでは、これまで考察の対象とされてきた諸例に検討を加え直し、当時の人々があえて同族目的語構文を用了理由がどこにあるかを推測した。また、「楯^(たて)(を)立つらしも」「八尺^(やさか)の嘆き(を)嘆けども……」「使ひ(を)其の国に遣はし……」などの例や、「まそ鏡^(かがみ)(を)見ませ我が背子」「官^(つかさ)の印^(むし)(押し)を押して……」「太祝^(ふたりのと)詞事^(こと)を宣れ」「枕^(まくら)を枕^(まくら)きて……」などの例、さらには「言^(こと)のみを堅^(かた)く云^(い)ひつつ……」「君^(きみ)が目^(め)を見む」などの例をも掲げて、語構成や表現のありかたを細かく分析した。さらに、個々の例が韻文・散文のどちらに現れるか、ということにも言及した【右に引用した「言のみを……」の例では、「いひつつ……」に一般的な「言ひつつ……」という表記を用了、現代では目

にする機会の少ない「云ひつつ…」という表記を、あえて用いた。動詞「いふ」の表記に「言ふ」を用いれば、それと名詞の「言」とを視覚面で識別しにくくなるからである。以下の論述でも、名詞には「言」を用い、動詞には「云ふ」を用いることにする。

同族目的語構文の例だと認められる上代語の表現は、他動詞と目的語とがどのような関係にあるかという視点から、次の三種に大別することができる。

- I 他動詞と目的語とが同源であるもの (ex. 「楯を立つ」「使ひを遣はす」)
- II 目的語が他動詞との複合語になっているもの (ex. 「印を押す」「鏡を見る」)
- III 他動詞と目的語とが語源を異にするもの (ex. 「眠を寝」「言を云ふ」)

三種のうち、IとIIIに属する例は数が僅少であり、IIに属する例が最も多い。また、IIに属する例の目的語にも、他動詞が複合語の前項になったものと、それが後項になったものとの二種がある。右に例示した「押手(を押す)」は前者の類であり、「影見(を見る)」は後者の類である【三種の分類は、後世の同族目的語構文にもそのままあてはまる。現代語の場合、IIに属する二種とは、たとえば「着物(を着る)」と「上着(を着る)」のような例である】。

ただし、IⅰIIIのすべての例に共通するのは、当然のことながら、どれも冗漫な表現でも気取った表現でもなかったということである。つまり、人々が自分の置かれた状況、自分の確認した事実、自分のいさぐ心情などを的確に描写しようとして、結果的に同族目的語構文を用いることになった、ということである。前稿でも述べたように、たとえば「寝」「思ふ」「泣く」が名詞の「眠」「心」「音」を伴っている際には、あえてそのような表現を用いた理由が推

測できる。「眠を寝」は単に横になるのではなく睡眠をとることを表し、「心を思ふ」はその「心」の内容を具体的に叙述する修飾成分を伴う。そして、「音を泣く」は忍び泣くのではなく声を出して泣くことを示すのである。

英語その他の言語で同族目的語構文を用いるのは、ある種の修辭的な効果をねらったことだという。これに対して、日本語の同構文の場合には、どの時代の例についてもそうした意図を読み取ることは、ごく少数の例を除いてできない。したがって、同構文の例を調査し考察することの意義はおのずから限定されることになる。ただし、上代の文献・資料に見える同構文の様態はどのようなものなのか、ということをもとまず調査・考察の対象として設定し、前稿で私見を述べた以上、さまざまな事情のために前稿で取り上げることのできなかつた諸例を、そのまま放置しておくわけにはいかない。放置しておけば、同構文に対する追及は中途半端なものになる、と考える。

今回、その意義が限定的であることを踏まえたうえで扱おうとするのは、具体的に言えば、右のⅡとⅢに属する数種の表現である。⁽³⁾それらの表現は、同族目的語構文の例だと認定するにはやや細かい検討を必要とする例ばかりである。以下の論述では、諸例の細かい検討を通じて、さらに古い時代における同構文のありかたに関して、一つの想定を行うことにしたい。

二

本節で実例を見ながら細かく検討を加えようとする表現は、「声呼ぶ」「足踏む」「香を嗅ぐ」の三種の表現である。まず「声呼ぶ」だが、これは『萬葉集』に三例ある。そのうちの一例は次の歌に含まれている。

1 月読の 光を清み 夕なぎに 加古能己恵欲妣 浦廻漕かかも

(十五・三六二)

一字一音のかたちで表記されている第四句は、一般に「水手の声呼び」と読み下され、「(船の)漕ぎ手が声を掛け」の意だと解釈されている。その読み下しかたにも解釈のしかたにも、特に問題はないと判断される。

現代語では、声を掛ける対象としての人物や動物などに助詞「を」を付し、「…を呼び」と表現するのが普通であり、「声呼ぶ」とは言わない。だから、現代人の感覚では、右の歌でも「呼び」を用いるだけで十分であり、わざわざ「声」という語を持ち出すまでもなかったのではないか、と思われる。ただし、複合語の「呼び声」を用いた、「網子調流海人之呼声」(三・二三八)というような表現なら、現代人にも大きい違和感とは与えない。

確かなどころでは、ほかに「水手之音喚…」(四・五〇九)と「船人毛鹿子毛許恵欲妣…」(十五・三六二七)の二例がある。現代人に違和感を与える「声呼ぶ」は、当時では一般的な表現だったことがわかる。三例の「声呼ぶ」はどれも船を漕ぐという場面で用いられており、船を漕ぐ時に大声を出して仲間合図するのを「声呼ぶ」と言ったようである。

この「声呼ぶ」は、同族目的語構文に属する一例である可能性が想定できる。言うまでもなく、「声」を伴わず、現代語のように「呼ぶ」だけを用いた例の方が『萬葉集』でもずっと多く、単独語・複合語を含めて数十の例がある。三例の「声呼ぶ」には、動詞と名詞との間に格助詞が位置する例は含まれていない。右に引用した「船人も水手も声呼び」は、「船人も漕ぎ手も声を掛け」の意である。「船人も水手も」は並立の「も」を伴っているが、実際には主格である。したがって、ほかの二例の「水手の…」もまた「漕ぎ手が…」という主格だと考えるしかない。そうであれば、「声呼ぶ」は、「声(が)呼ぶ」の意ではなく、「漕ぎ手が(声)を呼ぶ」の意である。「網代人舟召音…」

〔七・一一三五〕のような、「声（を）呼ぶ」を變形したと見なしうる「（…を）呼ぶ声」という表現も、少なからず例がある。

「声（を）呼ぶ」の用法は、同族目的語構文に属する「音を泣く」「言を云ふ」などの用法によく似ている。「音を泣く」「言を云ふ」のどちらも発声を伴う動作を表すものであり、その点で「声（を）呼ぶ」も同じなのである。上代の例には、既に述べたように「眼を寝」「心を思ふ」「目を見る」などもあるが、「泣く」「云ふ」にしる「寝」「思ふ」「見る」にしる、人間の基本的な動作を表す語である。「呼ぶ」もまたそうだから、これが同族目的語構文に属する一例であることに疑問の余地はないだろう。他動詞の「呼ぶ」とそれが伴う目的語の「声」とは、語源を異にしながらも互いにきわめて近い意味を表す語であり、さきあげたⅢに属する例である。

やはり「声呼ぶ」の一例ではないかと考えられる表現が、長歌の一部である次の歌句に見える。

2 いとのきて 短き物を 端切ると 言へるが如く 楚取る 里長が声は 寝屋処まで 来立呼比奴

〔五・八九二〕

「短き物を端切る」の二句は、「ひどい状況に、さらにひどい事態が重なる」の意を表す当時の諺である。貧しく惨めな生活を送るなかで、さらに追い打ちを掛けるかのように、鞭を手にした里長が寝屋までやって来て大声で呼び掛けた、というのが右の場面である。

三語が連接した「来立ち呼ばひ」は、三語が連接したままで『萬葉集』の索引に立項されており、一まとまりの表現だと理解され処理されている。しかし、「来立つ」「来立ち鳴く」「来立ち嘆く」などの表現がほかにあるから、「来

立つ」の二語に「呼ばふ」を付加したものが2の「来立ち呼ばひ」だと考えられる。

「里長が声は」は、それに続く「寢屋処まで来立ち呼ばひぬ」に意味的に掛かる、というのが一般的な理解であり、その理解は不適切なものだとは言えない。しかし、接続した三語と前後の語句との意味関係にこだわって文脈を見てみると、「里長が声は」という主語は最後の「呼ばひぬ」だけに掛かり、その前に位置する「来立ち」の二語には掛からない。「里長が声は—来立ち」という承接関係は成立しないのである。「来立ち」に掛かるのは「寢屋処まで」であり、その「寢屋処まで—来立ち」は、上代語の表現として自然なものである。「:」に「:」が示す特定の場所と「来立つ」という連接動詞とが結び付いた類例には、「金門かなとにし人の来立きたた者:」（九・一七三九）という表現がある。

「里長が声は—呼ばひぬ」という呼応は、「声は呼ぶ」と単純化しうるものである。その「声は:」という言いかたは、一般に「:を」という表現になる同族目的語構文として異例である。これについては、「声」と「呼ばひぬ」との間に「寢屋処まで—来立ち」が割り込んだために、本来あるべき「声(を)—呼ぶ」という呼応関係が緩くなったのだろう、とまずは想定できる。ほかには、やはり同族目的語構文の例である「心を思ふ」が、「松が枝えだを結ぶむす情者長等こころはなびやくとせむらひ曾念そね」（六八・一〇四三）という例のなかで、結果的に「心は—思ふ」という呼応関係になっているのも参考になるかも知れない。

以上のように考えてよいとすれば、「声(を)呼ぶ」とそれを変形したものと見なしうる「呼ぶ声」との関係は、同族目的語構文に特徴的に認められる、

音を泣く——泣く音

心を思ふ——思ふ心

言を云ふ —— 云ふ言

熟眠うまいを寝 —— 寝る熟眠

などの関係に同じものだろう。

次に本節で検討しようとするのは、「足踏む」という表現である。「足踏む」によく似た表現には「手握たにぎる」もあるが、ここでは「足踏む」だけを見てみる。⁽⁴⁾この表現もまた、動詞を用いるだけで意味・状況が十分にわかるのに、その動詞がことさらに目的語を伴うかたちになっている、という感想を現代人がいだきがちな表現である。

古い慣用句に、「二の足を踏む」というのがある。しかし、現代語で「踏む」を用いる場合には「足」を伴わない。一方、「足踏あしぶみ」という複合名詞ならば、普通に用いる。

「足踏む」は、『古事記』に一例、『萬葉集』に四例ある。

- 3 夏草あしひねの 阿比泥あひねの浜の かき貝かきいに 阿斯布麻須那あしふますな 明かして通れ
〔記八七〕
- 4 うちひさつ 三宅ひたつちの原ゆ 直土あしふみに 足迹貫あしふみぬき 夏草あしひねを 腰こしになづみ：
〔十二・三二九五〕

3の歌謡は、女性が男性に呼び掛けたものだとされている。「かき貝に足踏ますな」の「す」は敬語であり、ここは「貝殻を足でお踏みになられ（て、お怪我をなさい）ますな」の意を表す。現代語でならば、「足」を持ち出す必要はなく、「貝をお踏みになられませんか」といった言いまわしになるだろう。第五句の「明かして通れ」は、「（足元がよく見えるように）夜を明かしてからお帰り下さい」の意である。

4の「足踏み貫き」は、「直土に足踏み貫き」という続きから考えて、「足(を)踏み貫き」つまり「(地面に)足を踏みつけ」の意だろう。地面を強く踏みつけることを、やや強調した言いまわしである。直後の「夏草を腰になづみ」と対句を構成し、若者が苦勞をものともせず、女性のもとに通う様子を述べている。

3の「足踏む」は、単に「貝殻を踏んで足を怪我する」の意だと理解されている。これに対し、4の「足踏み貫く」については、当時は一般に裸足で外出するのが普通だったことを背景とする表現だ、という解説が注釈に見える。

残る三例の「足踏む」を見てみると、「剣大刀諸刃の利きに足踏、死なば死なむよ……」(十一・二四九八)、「浅茅原茅生に足踏心ぐみ……」(十二・三〇五七)、「刈りばねに安思布麻之牟奈、沓履け我が背」(十四・三三九九)という表現のものになっている。これらは、「鋭利な刃物で足を傷つけ、死ぬなら死んでもよい」、「茅の切り口で足を傷つけるように、(恋人のことで)心に痛みを感じ……」、「切り株で足を傷つけられますな。靴をお履き下さい、あなた」などの意である。刃物で足を傷つけるのも、茅の切り口で足を傷つけるのも、木などの切り株で足を傷つけるのも、沓を履かずに裸足で歩いて行くからである。最後の例には「沓履け」とあって、確かに相手の男性が裸足の状態で歩いていたことがわかる。「足踏む」は、「踏む」という動作によって、鋭く上がった物で足を傷つけることを表す表現だから、その「足」とは、具体的に言えば「裸足」のことである。

『萬葉集』には、接続動詞ではない単独の「踏む」は三十余例ある。しかし、その三十余例のなかには、足を傷つけることを述べた用例は含まれていない。「足踏む」は、右に述べたような特異な状況を表すのに用いる表現だったのである。

現代人は、「踏む」という行為は「足」によって表現することが自明だから、ことさらに「足踏む」とは言わない。上代語の「眠を寝」が体を横たえるのではなく睡眠をとることを示し、「音を泣く」が人知れず忍び泣くのではなく

声を出して泣くことを示すのと同様に、上代語であえて「足踏む」と表現する、然るべき理由があったのである。

「足踏む」の用例のなかには、間に助詞の位置する例がない。しかし、「踏む」という動詞は、上代から現代まで「…を踏む」と表現するのが普通である。上代語の「足踏む」は「足（を）踏む」の意であり、同族目的語構文の一例だと理解してよいだろう【「川の渡り瀬安夫美漬かすも」〔十七・四〇二四〕の「鏡」は、「足踏み」に由来する語であり、馬に乗る時に足を踏み掛ける道具をさす。中世には「鏡踏ん張り…」という表現があるが、これは、本来の語構成に戻せば重複した表現である】。

三

ところで、上代語の「言を云ふ」という表現を、前稿で同族目的語構文の一例として取り上げたことは、本稿の第一節で述べた。この「言を云ふ」に酷似するものに、「言（を）問ふ」という表現がある。「言を云ふ」を同族目的語構文の例だと認めるのであれば、その「言（を）問ふ」もまた同族目的語構文の例だと認めなければならない。

このように言えば、「言を云ふ」と「言（を）問ふ」では、「言を…」が両者に共通するだけだ、動詞の「云ふ」と「問ふ」とでは意味が異なるのではないか、という意見も出るだろう。しかし、それは必ずしも妥当な意見ではない。なぜなら、「言を…／言（を）…」を「云ふ」が承けた表現と、それを「問ふ」が承けた表現とは、「ものを言う／話をする」といったほぼ同じ意味を表すからである。「問ふ」の原義はともかくとして、この用法の「言問ふ」には「疑問に思うことを相手に尋ねる／質問する」の意を読み取ることはできない。

5 たたなづく 青垣山の 隔りなば しばしば君を 言不問可聞

〔十二・三一八七〕

6 語問之磐根、樹の立ち、草の垣葉をも語止めて…

〔大祓〕

5の第五句の「言問はじかも」は、「(青垣山が二人を隔てたら、たびたびあなたに)話しかけられなくなるだろう」の意である。また、「御言不御問…」(二・一六七)は、「言」が「御言」となり、「問はず」も「問はさず」となった敬語表現だが、「お尋ねにならず」の意ではなく、「お話しにならず」の意である。皇子が亡くなったことにより、ことばを発せられることはもうないのだ、という悲しみの籠もった句である。

「言(を)問ふ」の例は、『萬葉集』に二十余ある。一般の「問ふ」には、「尋ねる」の意のほかに「訪問する」の意もある。しかし、二十余の「言(を)問ふ」のなかには、「尋ねる」「訪問する」の意を表す例は見えない。ほかに、複合名詞化した「言問ひ」も五例あるが、「問ひ」の意味・用法は変わらない。⁽⁶⁾たとえば、「今日だにも許等騰比せむと…」(二十・四四〇八)という例は、「せめて今日だけでも親子で親しく話をしたい」という、子と別れなければならない親の心情を述べたものである。

6に引用した表現は、『延喜式』所載の祝詞の一部である。祝詞の「言(を)問ふ」は、6の「語問ひし磐根…」のほかに三例ある。計四例の「言(を)問ふ」は、6と同様にどれも上古の世界のことを述べた文のなかに出ている。皇祖神が、「我が皇御孫之命」に地上界の統治を命じようとした時に、地上は磐や草木や水の泡までが「語問ふ」という、ひどい騒乱状態にあった。それを、皇祖神が靈妙な神威を発揮して一掃し、そのあとで「皇御孫之命」を地上へ天降らせた、と述べた文である。だから、祝詞の「言(を)問ふ」は「ものを言う／話をする」の意である【6の「語止めて…」の「止め」は下二段活用他動詞であり、「(もの)を言うのを()止めさせて…」の意である】。

「ものを言う／話をする」の意を表す「言（を）問ふ」では、「言」を伴わずに単に「問ふ」だけを用いるわけにはいかなかったようである。「問ふ」だけでは、それは「尋ねる」「訪問する」などの意を表すと受け取られかねない。「言（を）問ふ」という連結形式あるいは「言問ふ」という熟語に仕立てることによって、「ものを言う／話をする」の意を表しえたようである。

現代語の「ものを言う」にあたる表現は、そのまま上代語の「もの（を）云ふ」にあたる。「もの語はず来にて…」（四・五〇三）という例と、「言問はず来ぬ」（十四・三五四〇）という例とを比較すれば、「もの（を）云ふ」と「言（を）問ふ」とがほぼ同じ意味を表すことは一読してわかる。

続いて、やはり同族目的語構文の例だと認められる、「香を嗅ぐ」という表現について検討する。これは、偶然のことかどうか不明だが、上代の文献には見えず中古から例が現れる。『古今和歌集』の「花橘の香を嗅げば…」（三・一三九）が、平仮名の文献に出ている最も古い例である。『枕草子』の「蜜の香をかぎて…」（二四四）は、よく知られた例である。

「嗅ぐ」という動詞の語源について、多くの辞書では解説を付していない。しかし、なかには「か（香）」に、接尾語「ぐ」の付いた形か」と疑問のかたちで解説を付している辞書もあり、「か」は、香の意」という断定的な解説を付している辞書もある。「塩気のみ香乎礼流国に…」（二・一六二）や「梅の花香乎加具播之美…」（二一・四五〇〇）のように、「香」には「かをる」「かぐはし」などの複合語が、既に上代語にある。だから、確かに「嗅ぐ」はもと「香ぐ」だった可能性がきわめて高い。また、「かぐはし」という形容詞は『萬葉集』に六例あり、そのうち四例まで語頭の「か」に「香」があてられている。当時の人々が、「かぐはし」は「香ぐはし」に由来すると認識していたことがわかる。一例しかない「かをる」も、右に引用したように「香乎礼」と表記されており、やはり本来は

「香をる」だった可能性がある。

上代では、「橋の尔保敝流香かも…」〔十七・三九一六〕のように、「香」に「にほふ」を用いたものが一例だけである。しかし、『古今和歌集』には、「花ぞ昔の香ににほひける」〔一・四二〕のような例がいくつかある。同集に見える「香を嗅ぐ」は既出の一例だけであり、ほかに「香をだににほへ」〔六・三三五〕が一例ある【上代語の「にほふ」にも『古今和歌集』のそれにも、既に嗅覚的な意味を表す例が見える】。

「香を嗅げば…」〔香をだににほへ〕では、動詞とそれの伴う目的語とがきわめて近い意味を表すものになっている。だから、これらは、上代の「眠を寝」「心を思ふ」「音を泣く」と同様に、同族目的語構文に属する例だと認められる。ただし、「香を嗅ぐ」の場合は、「香」を伴わないかたちで「嗅ぐ」とだけ言えば、現代語で「歌う」とだけ言った場合と同様に、表現として不十分だと感じられたのではないか。

四

複合語を本来の構成に戻してみた場合に、それを含む表現が、同族目的語構文あるいはそれに準じる表現であることが明らかに、といった例を本節で取り上げる。具体的には、「守る」と「夢を見る」と「形見を見る」との三例だが、どの表現も複合語だとかそれを含むものだとかということとは、一般には明確に認識されていない。

まず動詞の「守る」だが、この動詞の語構成が専門的な辞書の類でどのように解説されているか、当該項目をしてみる。『時代別 国語大辞典 上代編』に「目||守ルの意」だとあり、『小学館 古語大辞典』と『日本国語大辞典 第二版』の双方に「目(ま)守(も)る」の意」とある。また、『岩波 古語辞典』に「マ(目)モリ(守)の意」、『角

川古語大辞典』に「ま(目)」と「もる(守)」の複合語」だとある。ほかの古語辞典・国語辞典にも、この動詞の語構成を同じように解説してある。「目」の古形・被覆形である「目」と、二音節の「もる」という動詞とが複合して三音節の「目守る」が成立した、というのが定説だと言えそうである。

どの辞書の解説にも出ているように、三音節の「まもる」のほか、二音節の「もる」という動詞があった。「母い毛礼ども」(十四・三三九三)のような一字一音の例も、「防人(崎守)」「野守」「山守」その他の多くの複合語に含まれる「もる」もある。「まもる」「もる」のどちらも、上代の文献に少なからぬ用例がある。訓字としては、両動詞とともに「守」で表記されていることが多い。しかし、歌には七・五の音数律があるから、訓字の「守」を「まもる」と「もる」とで訓み分けることは容易である。

『古事記』『日本書紀』の歌謡に、「木の間よも行き麻毛良比…」(記一四)、「木の間ゆも行き摩毛羅毗…」(紀一一)という表現がある。これらの「まもらひ」は反復・継続の「ふ」を伴っているが、文献・資料に見える「まもる」の最も古い用例である。『萬葉集』には、「まもる」が十余例、「もる」及びその複合語が数十例ある。なかには「繩延へて守巻欲しき梅の花かも」(十・一八五八)と「引板吾が延へ真守有苦し」(八・一六三四)のように、両語の実例にはよく似た用法のものも見える。「まもる」「もる」の意味上の相違は、多くの場合に不明瞭であり微妙である。

『萬葉集』に見える一例に、「人目守ともしき妹に今日だに逢はむを」(十二・三一二二)というのがある。この「人目守り」は「人目を意識して／人目を避けて」の意である。この例のように、「目」と「もる」とが直結することがあり、両語の複合したものが「目守る」だろう。「人言の繁き問守而逢ふともや…」(十一・二五六一)では、「問」に「もる」が続いている。しかし、「まもる」は様子・状況をじっと見ると見るといふ文脈に現れるのが通例だから、本来

の語構成は「間守る」ではなくやはり「目守る」だと理解しておくのがよいだろう。

「まもる」には、「間守」〔十一・二六五七〕や右にあげた「真守有」などの表記もあるが、「目守」という表記は見えない。「間」「真」は借訓字であり、「まもる」の本来の語構成は、『萬葉集』の時代には既に不明瞭になっていたのかも知れない。

ところで、「目守る」は「目でじっと見る」の意である。同じく上代に例のある「手折る」が「手で折る」の意であるように、「目守る」の「目」は手段を表すから、これは「目で見る」の意だと考えてよい。同族目的語構文の一般的な様態からすれば、「目を見る」という意味関係になるはずだが、「目を見る」という言いまわしは、「君之目乎將見」〔十一・三三三六〕や「君之目不見而……」〔十二・二八八一、或本歌〕などのように、相手に直接に逢うことを意味する表現として別にある。

「目守る」では、「目」の被覆形である「目」が用いられており、それが「もる」と意味的に結合していることは明瞭である。しかし、露出形で単独語の「目」を含み、かつ助詞の「を」が間にある「目を見る」は、あくまでも三語から成る表現である。「目守る」と「目を見る」との間にあるこうした相違によって、両表現の意味上の相違もまた同時に示されている。

ただし、現代人の感覚では、「子守」「灯台守」などの「もり」は「そばにいて保護する／控えていて管理する」の意だから、「もる」の場合はことさらに「目」を加えて「目もる」とする必要はなかったのではないか、とも思われる。しかし、「音を泣く」が声を出して、「泣く」ことを示す表現であるのと同様に、「目もる」の場合も、目をそらすに、「もる」ことを示すために「目」を加えたのだろう、と推測できる。「目もる」は「目を守る」の意ではないが、同族目的語構文に準じる表現だとは言えるだろう【現代語の「見守る」は、「まもる」の「ま」がもともと「目」で

あることが忘れ去られたあとに、改めて「見」が付加されてきたものだろう】。

次に検討するのは、「まもる」に近い語構成をもつ、「夢を見る」という表現である。上代語の「夢」の語形は、「伊米」という表記が『萬葉集』に十数例見えるように「いめ」であり、「ゆめ」は中古以降に現れる語形である。既出の諸辞書で「いめ」の項を引いてみると、「いめ」はもともと「寢目」という複合語だと解説してある。ある辞書では、「イは寢。メは目」であり、「眠っていて見るもの意」だと解説されており、本来の語義・用法がよくわかる。辞書の解説にある「寢目」は、「眠を寢」に関して用いた本稿の表記に従えば、「眠目」となる。「眠目を見る」は、同族目的語構文の「眠を寢」が、「朝宿疑將寐」〔十・一九四九〕つまり「朝眠か寝けむ」となったような例に近い。「眠目」も「朝眠」も、「眠」が前項になっているか、後項になっているかの相違はあるが、ともに複合語である。

「夢を見る」では、「眠目」が「見る」の目的語になっている。それは「眠を寢」によく似た表現だが、「夢」を省略すれば表現は成り立たなくなる。結局、「夢を見る」は本来の語構成にさかのぼれば同族目的語構文の例、あるいはそれに準じる例なのだが、「夢」を省略して「見る」だけを用いることは、状況的に不可能である。「見る」の対象が何なのか不明だからである。

『萬葉集』では、自動詞を用いた「夢に見ゆ」が普通の表現だが、他動詞を用いた「夢を見る」も実際に数例ある。「夢に見る」は、「眠尔視」〔十九・四一六六〕のような表現を、名詞を複合語にするかたちで延長したものだろう。複合語をもとの語構成に戻してみることによって、同族目的語構文の例であることがわかる、という例であるのに、前稿で取り上げなかったものがまだある。それは、『萬葉集』の「吾形見見管之努波世」〔四・五八七〕、つまり「吾が形見（を）見つつ思はせ」という例である。この例から、「形見を見る」という表現が当時あったことがわかる。

「形見」は現代語にまで継承された語であり、「その人の形を見るもの意」だと解説している辞書があるように、

文字どおり「形」と「見」との複合台語である。

東歌に、

7 於毛可多の 忘れむしだは 大野ろに たなびく雲を 見つつ偲はむ

〔十四・三五二一〇〕

という歌がある。思う相手の「面形」、つまり顔かたちを忘れた時は、雲を見ながらその人を偲ぼう、という内容である。「面形」の「形」と、「見つつ…」の「見」とが複合したようなものが、「形見」である。確かに、「その人の形を見るもの意」だろう。

『萬葉集』には、「形見」の表記が二十例ほどある。「形見」の語構成は、「鏡」が「影」と「見」との複合語であるのに酷似する。「鏡を見る」が同族目的語構文の例である以上、「形見を見る」もまたその例だということになる。

その「鏡を見る」は、前稿で取り上げた例である。「鏡」の語源である「影」と「見る」とが、次の『古今和歌集』の表現に反映しているようである。

8 年ごとに鏡の影に見ゆる雪と波とを嘆き…

〔仮名序〕

「年ごとに、鏡に映って見える白髪と皺とが増えるのを嘆き…」の意である。このほかに、同集に「鏡」「影」「見る」の三語が詠み込まれた次の二首がある。

- 9 行く年の 惜しくもあるかな ます鏡 見る影さへに 暮れぬと思へば
〔六・三四二〕
- 10 怨みても 泣きても言はむ かたぞ無き 鏡に見ゆる 影ならずして
〔十五・八一四〕

「鏡」は「見る」ものだから、この両語が一連の表現に現れるのは当然である。しかし、「鏡」「影」「見る」の三語が共存する二首のような歌も、中古の別の歌集には少なからず見えており、人々の意識のなかで三語が結びついてきたことを物語る。あるいは、「鏡」は「影見」^{かがみ}に由来するという語源意識がまだ残っていたものか。

五

同族目的語構文の例なのかどうかという問題に、漢字の本文をどのように訓ずべきかという問題が絡む、『萬葉集』の歌句がある。

次の歌の第三句「言齒五十戸常」がそれで、この句は「云ひは云へど」と訓ずべきか「言は云へど」と訓ずべきかが、問題である。前者は古写本に見える訓だが、現在は一般に後者の訓が採用されている。

- 11 真玉つく をちこち兼ねて 言齒五十戸常 逢ひて後こそ 悔いにはありと云へ
〔四・六七四〕

第二句・第三句は、「相手は二人の仲について）あとさきのことを考えていろいろなことを言うてくれるが」の意である。第三句が「云ひは云へど」であれば、「通ひは行けど（去来者行跡）…」〔四・四八五〕のように、「…は

…：…ど」という形式で逆接を強調した句となる。この訓は古写本に見えるものだから、中古及びそれ以降の表現として大きい違和感を伴わないものか、違和感のまったくないものか、のどちらかだったのだろう。ただし、上代の文献には、同じ動詞の間に「は」がある構文の例は見あたらないうである。「は」が介入しない、「雖行往」〔十六・三八五七〕といった反復形式ならば例がある。

一方、「言は云へど」であれば、「言を云ふ」という同族目的語構文を逆接の表現に仕立てた句となる。既出の「言のみを堅く云ひつつ…」や、『古事記』の「許登をこそ菅原と伊波め…」（記六四）や、「事清くいたも莫言」（四・五三七）など、「言を云ふ」と単純化しうる表現がいくつかある。だから、11の第三句を「言は云へど」と訓じることが可能だと考えられる【最後に例示した「事清く…」の「事」は、「言」にあてた借訓字である。『萬葉集』の「事」と「言」とは厳密に使い分けられていない】。

本稿の目的は、上代の同族目的語構文を再検討することにあるから、その視点に立って「云ひは云へど」と「言は云へど」の両訓を見てみる。「言は云へど」は同族目的語構文の一例だということは述べたとおりだが、実は「云ひは云へど」もまたその一例だと見なしうる。それは、時代的な変化が「云ひは云へど」と「言は云へど」との関係に想定されるからである。つまり、「言を云ふ」の目的語である「言」と、「云ふ」を連用形名詞にした「云ひ」とは、意味的にも文法的にもほぼ等価であり、目的語として互換性があったのだろうと推定される。だから、11の第三句に限らず、「言を云ふ」という同族目的語構文の目的語に、「云ひ」から「言」へという時代的な変化が起こった可能性が想定できるのである。

その可能性を増大させるものに、「寝」を用いた同族目的語構文の例がある。それは「寝」に接頭辞の「さ」が付いた表現であり、『古事記』の次の歌謡に見える。

上代語の同族目的語構文を再考する（佐佐木）

12 うるはしと 佐泥斯佐泥弓婆 荊薦の 乱れば乱れ 佐泥斯佐泥弓婆
〔記七九〕

第二句と第五句に、同じ「さ寝しさ寝てば」という句が用いられている。両句に用いられている第一の「さ寝」については、ほとんどの注釈に名詞だと解説してある。現に、「佐弥に吾は行く」〔十四・三三六六〕の「さ寝」のように、「さ寝」という連用形名詞があった。

一方、「さ寝しさ寝てば」に含まれる二つの「さ寝」が、ともに動詞として機能している可能性はきわめて低い。というのは、動詞の機能をもつ同じ語を、助詞を介して重ね、それを強調表現に仕立てた例は、上代語には見あたらないからである。同じ動詞の連用形を反復し、それに「て」を付した「住み住みて」「行き行きて」などといった表現は十例ほどあるが、「住みし住みて…」「行きを行きて…」のように助詞を含む反復形式は皆無なのである。だから、助詞「し」が間にある12の「さ寝しさ寝てば」の場合、第一の「さ寝」は名詞だと見なければならぬし、「さ寝しさ寝てば」は同族目的語構文の例であることになる。

この「さ寝しさ寝てば」と一般的な「眠を寝」とを見比べれば、第一の「さ寝」と「眠」とは目的語として構文的に等価である。それは、11の「言齒五十戸常」を「云ひは云へど」と訓じた場合の「云ひ」と、一般的な「言を云ふ」の「言」とが構文的に等価であるのと同様である。だから、「さ寝」と「眠」とについても、両者の間に同種の時代的な変化が起こったことが想定できる。

しかし、12の「さ寝しさ寝てば」が11の「云ひは云へど」の類例だと言えるのは、11の本文である「言齒五十戸常」を、「云ひは云へど」という同族目的語構文として訓じた場合である。同構文のありかたという視点からでは、

その本文を「云ひは云へど」「言は云へど」のどちらかに訓じるのが適切か、明確な判断を下しえない。

ここで詳しく述べる余裕はないが、「思ふ」を用いた「心を思ふ」という同族目的語構文についても、その「心」の部分に、より古い時代には「思ひ」が用いられていた、と想定することができる。⁽⁷⁾

同族目的語構文に属する表現を用いようとする場合、他動詞ときわめて近い意味をもつ目的語を提示するには、とりあえず二つの方法があった。一つの方法は、他動詞「云ふ」「さ寝」「思ふ」の連用形名詞である「云ひ」「さ寝」「思ひ」を、そのまま目的語として用いるものである。もう一つの方法は、それらの連用形名詞になるべく近い意味をもつ、本来の名詞がほかにあれば、それを選んで目的語として用いるものである。二つの方法のうち、他動詞と同じ動詞の連用形名詞を用いる方が、単純で容易であるだけでなく、確実でもある。一方、他動詞に近い意味をもつ、本来の名詞を選んで用いようとしても、実際には適切な名詞が存在しない場合もありうるから、こちらは方法として確実性に欠ける。

本稿の冒頭近くに、同族目的語構文に属するものとして、『萬葉集』の「八尺やぶかの嘆き(を)嘆けども…」という例をあげた。この「…の嘆き(を)嘆く」という例の場合、「嘆き」に近い意味の名詞があればそれを目的語として用いたはずである。しかし、上代語を広く見渡してみても、「嘆き」に近い意味を表す本来の名詞は見あたらない。「使ひを遣はず」の「使ひ」についても、同じことが言える。このような場合には、連用形名詞を用いるしか方法はない。

六

『古今和歌集』には、「植ゑし植ゑば秋無き時や咲かざらん」〔五・二六八〕という例があり、同じ「植ゑし植ゑば

…」は『後撰和歌集』にも見える。また、両歌集には「恋をし恋ひば…」という表現も見える。これらのうち、「恋をし恋ひば…」は同族目的語構文の例だと言えるが、「植ゑし植ゑば…」は同構文の例ではない。強調のために同じ動詞を反復した形式であり、「しっかりと」「いぢずに」などの意を添えるものとして用いられている。これに類する強調表現は、『古今和歌集』だけでも「会ひに会ひて」「吹きと吹きぬる」「しぐれしぐれて」「かへるがへるも」「間無く時無く」その他、数多く用いられている。中古の歌には、さまざまな形式で同語・類語を反復した強調表現が特に好まれたのである。

注

(1) さらに現代語の例を探せば、ほかに「網を編む」「数を数える」「堀を掘る」「周りを回る」などもあり、どれも他動詞と目的語とは同源である。

(2) 小著『上代日本語構文史論考』（二〇一六年、おうふう）の第1部第一章。ただし、以下に言及する「声（を）呼ぶ」「形見を見る」「香を嗅ぐ」などについては、前稿で取り上げていない。

(3) 前稿でも述べたことだが、「取る」と「手」「見る」と「目」の間に密接な語源上の関係がある、という考えが古くからある。しかし、同族目的語構文を扱うにあたっては、これらの例にまで枠を広げる必要はないと考える。

(4) 『萬葉集』に三例ある「手握る」について、要点だけを述べておく。この表現には二種の意味がある。

a 面忘れ だにもえずやと 手握而 打てども懲りず 恋といふ奴
〔十一・二五七四〕

b 剣大刀 腰に取り佩き さつ弓を 多尔伎利物知提 赤駒に 倭文鞍うち置き…
〔五・八〇四〕

前の歌は、「拳を作って打ったにもかかわらず、恋という奴は懲りずに自分を苦しめる」と言っていて、恋の苦しさを訴えたものである。あとの歌は、「剣太刀を腰に帯び、獵に用いる弓を握り持つて…」と述べて、若者の勇ましい姿を描写したものである。残る一例の「手握る」は、bと同じく弓を手に持つ意の「手握り持つ」という例である。

「拳を作ること」をさす a の「手握りて」だが、現代語の「手(を)握る」は、拳を作ることのほかに、人と握手すること、人と力を合わせることも表す。一方、「手握り持ちて」という、連接動詞を含む b の表現は、手で物を握って持つことをさす。

拳を作るとは、現代語でも「手を握る」と言うのに対し、物を手に収めてしっかり持つという場合には、「握る」だけでなく十分であり「手」を伴わない。

(5) 5 の歌の「君を言問はじかも」という部分は、一つは他動詞が二種の目的語を伴う表現の一例かも知れない。だとすれば、「君を言(を)問はじかも」という構文のものだが、二つめの「を」は原則として省略されるという、上代語の表現のありかたに一致する。しかし、当時の「言問ふ」は、注(6)に述べるように既に複合語化していた可能性がある。一つは他動詞が二種の目的語を伴う表現については、注(2)にあげた小著の第一部第二章で検討した。

(6) ただし、『萬葉集』にも、助詞の「を」が間にある形式の「言を問ふ」はなく、実際に例があるのは「…を言問ふ」「…に言問ふ」である。これらの事実に基づいて、注(2)にあげた小著の第一部第二章で、「言問ふ」は既に意味的に緊密に結び付き、複合語になっていただろう、という私見を述べた。

(7) ただし、連用形名詞の「思ひ」を用いた同族目的語構文の場合は、動詞の反復による単なる強調表現と識別することが難しい。この点については、別稿で扱うこととする。

(日本語日本文学科 教授)

